

# 保 育 奉 公

## 大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

明治天皇御製

かたはらに眠るうなゐは夏草をかるしづのめがうまごなるらむ

照りつける日盛りを、破れ菅笠、背も汗にぬれて、せつせき働きつゞけてゐる草刈女、その母の心づかひの木蔭に置かれて、紅のはげた風呂敷包みを枕に、すやく／＼眠り入つてゐる幼児、一幅の夏日情景詩である。しかも、その母にその子を眺め給ひ、その子にその母を顧み給へる、御慈みの御心の御したゞりを、御製に謹誦し奉るのである。詩韻こまやかに、たゞ／＼畏き極みである。

母を護り、子を護れこは、現代最重要の政治であり、國策である。或は人口政策の基本問題として、或は増産國策の必須要件として、その説かるゝや理を盡し、論を盡して周到である。更にその理に基いて企畫せられ、その論に則つて施設せられて完備を期せられる。たゞ、時に憾むらくは、母がたゞ「勤勞母性」をして問題にせられ、「要保護幼児」をして對象にせられ、そこに何等、母子の事としての情味のゆたかさも、うるほひもなかつたりする。即ち、その母にその子を眺め、その子にその母を顧みることが無かつたりする。

御製を謹誦して、思ひを世事の論議に移すは畏れ多き限りである。たゞ餘りの有り難さに、この草刈りの母とその子との、至上の幸福をおもふのである。

(倉橋惣三謹誦)